



KWACHA

NO.3

Kwacha (クワチャ) はチェワ語で「夜明け」を意味します。

当協会の1985年

<第3回通常総会開催される>

1985年5月18日(土)、東京都新宿区の日本青年館において日本マラウイ協会第3回通常総会が開催されました(会員には既報)。

総会には15名が出席しました(ほかに委任状による出席50名)。開会にあたり、卜部敏男会長より、会員各位の労を多とするとともに、今後、より一層の活動ををはかられたい旨、はげまし言葉がありました。議事においては、1984年度の事業及び決算の報告並びに1985年度事業計画及び収支予算が審議され、原案どおり承認可決されました。また、秋山忠正副会長より、会員加盟について、個人及び団体に加えて、法人に対しても今後大いに加盟を呼びかけることが好ましい旨、発言がありました。

承認された1985年度事業計画では、(1)機関紙「Kwacha」の継続発行など「広報活動」を行うこと、(2)「This is Malawi」などマラウイにおける出版物の定期購読など「資料収集活動」を行うこと、(3)「チェワ語・日本語辞典」や「比較生活文化事典」の編集など、「出版物の刊行」活動を行うこと、(4)その他、医療品や教育機器等をマラウイに寄贈する可能性調査や、同国留学生・研修生受入れ増大の支援を行うことなどが挙げられています。

<「マラウイの概要と国際協力」まとまる>

協会内のプロジェクト委員会がかねてより文献等によって調査していた同国の経済・社会状況を簡潔にまとめその国際協力についても記述したパンフレット「マラウイの概要と国際協力」は、去る5月22日付けで印刷され、全会員及び関係者に配布されました。パンフレットはA4版4ページ。同国の土地制度についても解説するなどコンパクトながら中身の濃い資料として活用が期待されます。

<「チェワ語・日本語辞典」編さんすすむ>

1983年2月に当協会が発足して以来の念願である「チェワ語・日本語辞典」の発行に向けて、今、編さん作業が進んでいます。精選単語約2000語についてチェワ語から日

本語へとその逆のいずれの場合にも使えるようにしたいということです。ポケットサイズにし、マラウイ国を訪問する日本人が手軽に携帯できるようにしたいと、会員有志は力を注いでいます。担当理事は三浦洋子氏(協力隊OG)。

<「比較生活文化事典」編さん準備中>

「比較生活文化事典」(金山宣夫著、大修館書店刊)は、日常の食事から婚姻制度、企業の特徴、死生観まで、生活と文化の具体的特徴300項目について世界各国を比較した「読む事典」です。マラウイと、例えばネパールやパラグアイなどの内陸国もしくは日本などと比較してみると興味深いものとなるでしょう。300項目はKwacha No.2(1985年2月15日発行)に掲げてあります。御協力をお待ちしています。担当理事は本作芳英氏(協力隊OB)。

<資料収集すすむ>

当協会では、「This is Malawi」、「Moni」、「Malawi News」などを定期購読しており、政府発行の年報や経済報告、地勢図なども鋭意入手しています。閲覧御希望の際には協会まで御連絡ください。

<毎月第3水曜日定例会開催>

当協会では、通常総会で挙げられた各種の事業の詳細を検討し、実行するため、毎月第3水曜日の午後7時から定例会を開催しています。定例会は、当協会本部(東京都目黒区のリオマンション [別掲])で開催されることが通例ですが、場合によっては恵比寿駅近辺など、会場が変わることがあります。

本年度においては、これまで7回の定例会が開かれ、「チェワ語・日本語辞典」の編集方針、「比較生活文化事典」の準備手順など、少人数ながらさまざまな案件を検討してきました。事務局では、ひとりでも多くの会員のかたがたに御助力と御支援をお願いしたく、是非御参加くださるようお願いしています。

マラウイ国への青年海外協力隊員派遣実績

(1985年11月15日現在)

	派遣中	帰国	計
男子	56名	309名	365名
女子	35	147	182
計	91	456	547

日本マラウイ協会会員 只今112名

昭和60年12月1日現在

入会のおすすめ

日本マラウイ協会 (Malawi Society of Japan) は、日本とマラウイ両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的とする任意団体です。

趣旨を御理解の上、広く各位の入会を希望します。

入会方法

所定の入会申込書に各項記入の上、入会金(個人正会員は1,000円)及び年会費(同年額3,000円)の合計(個人正会員の場合は計4,000円)とともに、下記にお送りください。

〒153 東京都目黒区五本木2丁目18-14

リオマンション2F

日本マラウイ協会

なお、入会金及び年会費は下記の銀行口座へ送金してください。ご迷惑なくとも結構です。

三和銀行 東惠比寿支店

普通口座 255739

口座名義人: 日本マラウイ協会

代表 卜部敏男

また、協会規約・入会規定その他については上記住所の協会、もしくは別掲貝塚光宗(協会専務理事)あてお問い合わせください。



計 報

タンザニア交通事故で6名逝去

青木伸子隊員(マラウイ・保健婦)

北川和由隊員(マラウイ・電算機技師)

相磯 周隊員(マラウイ・溶接技師)

川島雅信隊員(ザンビア・獣医師)

林不二夫隊員(マラウイ・建築技師)

藤原敏雄隊員(マラウイ・臨床検査技師)

去る11月21日(木)タンザニアの北部モシ近郊で、マラウイ、ザンビア、タンザニアの協力隊員10名の乗ったマイクロバスが大型バスと衝突、6名が亡くなるという惨事が起きました。

亡くなったのはマラウイ派遣の青木伸子隊員(昭和59年度1次隊、保健婦、新潟県出身、保健省ゾソバ総合病院で活動)、北川和由(かず

よし)隊員(同、電子計算機、東京都出身、教育省資格試験委員会で活動)、相磯周(あいそ・めぐる)隊員(同、溶接、東京都出身、工業補給省訓練センターで活動)、林不二夫隊員(昭和59年度2次隊、建築、茨城県出身、工業補給省本省で活動)、藤原敏雄隊員(同、臨床検査技師、東京都出身、ビルハルツ住血吸虫対策プロジェクトで活動)、ザンビア派遣の川島雅信隊員(昭和59年度2次隊、獣医師、東京都出身、農業水資源開発省獣医ツェツェ局マザブカ地区で活動)の6名の方々です。

逝去された6名の青年海外協力隊員に対し、ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

12月5日、東京、日本青年館において、安倍外務大臣ら外務省、国会、国際協力事業団、協力隊を育てる会及び協力隊のOB・OGを含む関係者が出席し、合同慰霊祭がとり行われました。

This is Malawi 誌で当協会紹介される

マラウイ糾介のために同国の情報局が発行している月刊誌「This is Malawi」では、1984年12月号で日本マラウイ協会に関する特集記事を掲載し、当協会が編集した国情紹介誌「Malawi - the Warm Heart of Africa」(1984年8月)をとりあげ、当協会を紹介しました。

記事の内容は国情紹介誌「Malawi」の概要を親しみを込めて説明したものであり、当協会の活動を紹介するとともに、青年海外協力隊のマラウイでの活動や帰国後の活動を解説しています。

また、この記事を読んだマラウイの青年から、当協会への問合せの手紙等も届いており、協会事務局ではその対応に追われています。当協会の活動をマラウイの人々に知ってもらう点で、この記事は大いに貢献してくれることでしょう。

以下にその全文を紹介します。

元協力隊員が日本でマラウイを紹介

日本の切手をはったその大きな封筒は、情報局の職員が毎日ブランチアの私書箱499から取り出している封筒と同じように見えた。封筒は重かったが、それも珍しいことではない。

しかし今回は驚くことがあった。封筒には日本の刊行物が入っており、「マラウイ—アフリカの暖かき心」というタイトルがあったからだ。それは日本語と英語で書かれている。

表紙は子供の笑顔の写真だ。元気に、幸せのほほえみをたたえた、マラウイの子供だ。

職員の誰もが興味津々、英語の箇所を読み進んだ。まず最初の見開きページには、ムランジェ山のカラー写真が広がっている。近景には耕地が広がり、写真のキャプションは日本語だが、それは見まごうことなく、青空の下に雄大なムランジェ山の景色だ。

次ページの全面は地図であり、アフリカの中にマラウイが灰色で描いてある。地図の標題は日本語だが、近隣の国々はマラウイと同じように英語で示されている。

次ページは鮮やかな色調のマラウイ国旗と各地の地形を示したマラウイの地図だ。やはり英語と日本語の両方の説明が入っている。

引き続き2ページにはマラウイのアウトラインの地図があり、カロンガ、ニイカ、ムズズ、リロングウェ、ゾンバ、ブランチアが示してある。地図から放射状に矢印が伸びており、各地の写真を指している。ニイカ高原のシマウマ、カロンガ近辺のマラウイ湖岸道路と巨大なバオバブの木、サリマから見たマラウイ湖、クラブマココラのヨット、ゾソバ山を背景に舗装道路を走るバス、そしてブランチア市ビクトリア通りの街角風景。写真は白黒だが鮮明でよくわかる。

引き続きページにも写真が掲載されている。“ムベレコ”(だっこ布)で赤ちゃんをだいている女性、象牙を運ぶ19世紀のポーター達、それにブランチア教団のセントマイケル・アンド・オールエンジェルス教会だ。さらに、ルンピのリビングストニア教団のCCAP教会にあるあの有名なステンドグラスの窓、ジョン・チレンプエ師と妻子、一頭のシマウマ、戸外での体操服姿の女生徒たち、授業風景、父と子、ブランチア市の街角風景、遊ぶ子供たち、盛装したグレワムクル(民族舞踊)の踊り手、村の風景、そして5歳未満児用診療所で働く日本人看護婦の写真がある。

編集者と編集に参加したアーティストは、多くのさし絵を載せており、景色や民話の動物たちが描いてある。

最後の2ページには、チェワ話の英訳と日本語訳のリストが載っている。日本語の文章は左から右へ横書きであり、この刊行物も、マラウイの刊行物と同様、左から右へ横書きになっている。

この刊行物の編集・発行者は、青年海外協力隊事業でかってマラウイに来たことのある隊員OB・OGだ。マラウイでの協力隊活動は1971年から続いている。

協力隊のOB・OGらは、日本でMalawi Society of Japan(日本マラウイ協会)という会を設立している。日本マラウイ協会の目的はマラウイを日本人に

知ってもらうことであり、住所は東京都目黒区五本木2-18-14(〒153)。同協会は、日本を訪問するマラウイ人なら誰でも歓迎するそうで、事前連絡さえあれば、協会会員と会談の機会をつくるという。

この刊行物を情報局に送ったのは協会専務理事の貝塚光宗氏だ。

協力隊事業が1971年にマラウイでの活動を開始して以来、約410名の隊員が来ており、高等学校の理数科教師として、政府機関の技術者として、病院の看護婦として、あるいは主要プロジェクトの医療従事者や技師として働いた。

今年はマラウイに90名の協力隊員がいる。



This is Malawi 誌 1984年12月号表紙。(写真はマラウイのバンダ大統領とモザンビークのマシェル大統領。1984年10月、ゾンバ市。)

協力隊の事務所は、ブランチア郊外のニヤンバドゥエのチレカ道路沿いにあり、マラウイ駐在員は長倉孝氏である。

注：1985年3月15日から、長倉氏に代わり、奈良輪睦美氏がマラウイ駐在員になっています。

VOLUNTEERS DEPICT MALAWI TO FELLOW JAPANESE

The large envelope bearing Japanese postage stamps looked the same as those collected by officials of the Department of Interim each day from Box 494, Blantyre. It was heavier than usual, but even this happens from time to time.

But there was a surprise for them. Inside this envelope was a publication from Japan - Malawi, The Warm Heart of Africa, printed in English. The rest of the characters were Japanese.

The cover bears a picture of a smiling child, full of health and happiness - a Malawian child.

Everybody was keen to look at this publication and later read what could be read in Latin script.

Spread between the inside front cover and the first page is a full color picture of Mulanje Mountain with a ploughed field in the foreground. One cannot mistake the scenery of Mulanje in all its majesty on a sunny day.

The caption to the picture is in Japanese characters, however.

On the second page is a fullpage map showing Malawi in grey shading. The title of the map is in Japanese characters, but the

bordering countries are shown in Latin script which is used in Malawi.

The third page carries the Malawi flag in full bright colours as well as a map of Malawi showing physical features, also in English and Latin script.

Another outline map of Malawi is on the next two pages showing Karonga, Nyika, Mzuzu, Lilongwe, Zomba and Blantyre. And radiating from the map are arrows towards pictures of zebra on Nyika Plateau, the lakeshore road showing a giant baobab tree around Karonga, a lake scene at Salima, pleasure craft on the lake at Club Makokola, bus on the tar road with Zomba Mountain in the background, and a street scene on Victoria Avenue in Blantyre City. The pictures are black and white, but clear and very recognizable.

Subsequent pages show pictures of a woman with a child, carried with "mbeleko", a group of porters of the last century carrying ivory, St. Michael and All Angels Church of Blantyre Mission. The famous stained glass window of the C.C.A.P. Church at Livingstonia Mission in Rumphu, Rev. John Chilembwe with his wife and child, a lone zebra, an outdoor group of girl students in sports gear, a class in session, a father and child,

street scene in Blantyre City, children at play, gulewankulu dancers in their regalia, village scene, and a Japanese nurse at an underfives clinic.

The editors and their artists have added a number of free hand drawings of scenes and animals in fables.

On the last two pages are a list of Chichewa words with translations into English and then Japanese. Japanese script is written from left to right and the publication is printed from left to right, as those in Malawi are printed.

The publishers and editors of the publication are former volunteers who came to Malawi under the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) programme which has operated since 1971.

The ex-volunteers have formed a society in Japan known as Malawi Society of Japan, or in Japanese Nihon Malwi Kyokai.

The society aims at making Malawi known to the Japanese and its address is 2-18-14 Gohongi, Meguro-ku, Tokyo 102.

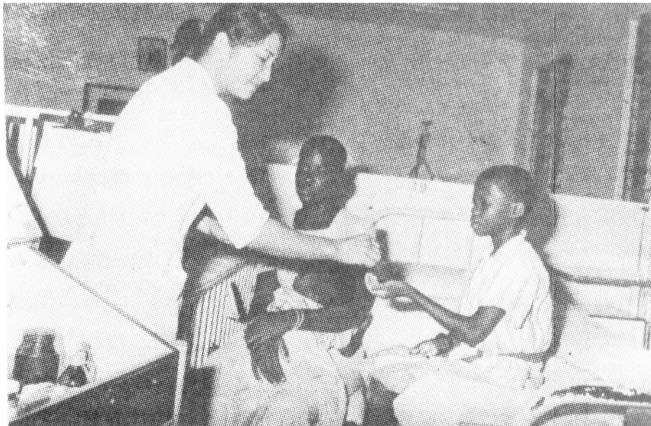
It has issued an open invitation to Malawians visiting Japan to meet members provided due notice is given to them.

The person who sent the publication to the Department is Mr. Mitsunome Kaizuka, Executive Director of the Malawi Society of Japan.

Since the JOCV programme came into being in 1971 some 410 volunteers have been to Malawi to work here as teachers of mathematics and science in secondary schools, technicians in government departments, nurses in hospitals, health workers and engineers in major projects.

This year there are 90 volunteers in the country.

JOCV offices are on Chileka Road in Nyambadwe suburb of Blantyre City and the Resident Representative in Malawi is Mr. Takashi Nagakura ●



nurses patients at Nsanje hospital

日本人はいつでもよるこんでマラウイのへき地で働く。写真はサンジェ病院で看護にはげむ日本の看護婦ボランティア。

来日マラウイ研修生日本を語る

グリフィン・ラシード・クンジェ氏(29歳)は、1985年7月から、秋田県海外技術研修員受入制度により、技術研修生として9か月間の予定で滞日し、秋田市において電気技術の研修(職種:高圧電気機器保守操作,受入れは日本電気興業株)を受けています。このたび、秋田の印象、人々とのふれあいなどについて印象記をまとめてくれました。クンジェ氏ならびに印象記の翻訳等に力を尽された秋田県・海外協会の御厚意を得て、ここに紹介します。

私の秋田印象記

東京の成田空港に着いたのは1985年7月6日のこと。いよいよ新しい世界に着いたという実感がする。マラウイから3日かかった長い飛行のあいだ、言葉の違う世界でどうやって意を通ずればよいかとのみ考えていた。

美しい東京に到着した途端に、その高度なテクノロジーに驚き、その一つ一つについて書こうとすれば、一冊の本を書き上げることができるのではないかと思われる程。早速留学生受入れの任に当る県関係の人たちに迎えられる。

宿泊所に案内され、ザンビア、ネパール、ブラジル、アルゼンチンからの僚友たちと会う。言葉についての問題は全然なし、というのは、出迎えてくれた県関係の人の中で、私たちの語学教官がいたので、何かあれば先生を通じればうまく事は運ぶ。

東京を寝台列車で発ち、秋田に向かう。翌朝秋田着。寮の主人と県庁の人たちに迎えられる。私たちの寮の主人は温かく迎えてくれて、部屋に案内される。とても良い居室で快適。すべてが手際よく準備されている。しかし、リロングウェを発つ時は寒かったので、暑くて余り良く寝られない。

最初にびっくりしたのは家に入るとき靴を脱ぐこと。「郷に入っては郷に従え」のたとえどおりにしたが、何故靴を脱ぐのかと聞けば、それが日本の習慣だとのこと。

私たちを受け入れてくださった秋田県知事と会う。滞在中はなるべく多くの日本人と交流し、技術だけでなく、日本人や文化についてできるだけ学びとるよう激励される。一般的に日本人は親切で皮膚の色にこだわらず外国人にとっても関心があるようで有難い。常に清潔な秋田市で、心の清らかな人びとと私とともに学ぶことができるのだ。

寮の食事はたいへん良く、くつろげるようによく気配りしてくれるので、故郷にいるのと同じような感じ。食物は国と同じで、調理法が違うだけだ。箸を使ったのは初めて。箸の使い方には苦労したが、今ではすっかり上手になった。ある日、日曜日だったので好きな場所で外食。ホテルのレストランに行った。ナイフとフォークが出されたが、私はしばらくの間左右あべこべに使ってしまい、結局箸をもらって食べた。

言葉の問題があるにもかかわらず、私たちはホームシックにかからない。というのは、外国事情に関心のある諸団体との交流があるからだ。そしてそれらのグループから友達を選び出せばよい。英語を習いたい人もいて、お互いに助け合う。その人たちは日本語を教えてくれ、私たちは英語を教えるといった具合だ。

しかし、何といても2カ月間の日本語研修は、病院とか、郵便局その他重要な場でのコミュニケーションに大いに役立った。しかし、「日本語はやはりムズカシイ」。特に平仮名は難しい。今では私も若干片仮名と漢字の読み書きができる。私は愛煙家なので、禁煙のサインがあるのにたばこを吸って失敗してはいつも恐れており、「禁煙」といったような表示は英文のサインでもあればと思った。

海外協会では、私たちの見聞を広めるために各地を旅行させてくれる。今までに、八幡平、田沢湖と北海道旅行をした。これは単に技術を学ぶだけでなく、日本の文化や風光をみることができ、たいへん良いことと思う。日本人は一般に親しみやすく、特に年配の婦人が親切だ。その人たちは私たちに関心があるようだ。少年、少女ははにかみ屋だ。日本人は英語を話すとき間違わないかと恐れていることに気付いた。ところが学校では英語の授業を受けているので、大多数の人たちは立派に英語を書けるが、話すのは「ムズカシイ」とのこと。

私の技術研修は順調に進んでいる。唯一の問題は言葉の点ではあるが、使用機器は少しばかり異なるけれど、何かを得たいものと努力している。というのは、私の仕事に関連する故障発見のためテストをする時は、この国の高度なテスト機器の使用は、帰国すれば使用のチャンスはないだろうと思うからだ。しかし、世の中は変わりつつあり、技術も変っていくのだから、良い経験だとは思ふ。

私のインストラクターのかたがたは、各種の機器の操作や維持管理について熱心に指導してくれるが、唯一の問題はマニュアル(手引書)が日本語で書かれていて読めないこと。しかし、親切な人たちがいて私のために翻訳してくれる。特に私の語学教官の喜多川先生は、最善をつくして翻訳してくれている。

何はともあれ、私は日本に来ることができ、私自身のために見聞を広め、同時に私の国の発展のために、専門分野の高度な技術研修を受けるということを喜んでいる。そして、またいつの日にかこの素晴らしい国をぜひもう一度訪ねる日のあることを切望している。

グリフィン・ラシード・クンジェ
アフリカマラウイ国、海外技術研修員(29歳)
住所:秋田市茨島2丁目和光寮内

My Impression in Akita City

Arriving in Japan at Narita Airport in Tokyo in the afternoon of 6th July 1985, indeed I was really in the new world. Throughout my long flight from Malawi which took me three days, I was just imaging how I will be able to communicate in the world of different languages.

As I touched down in the beautiful city of Tokyo, everything was quite amazing in its high technology and, if I can try to write each and everything i could write a book. I was welcomed by members of Akita Government, who are responsible for overseas students. And I was taken to a hotel where I met my fellow trainees from Zambia, Nepal, Brazil andArgentina. Communication was not a problem as the government members who welcomed me included our language teacher so whenever there was anything we were going through him.

We left Tokyo by sleeping train to Akita and arrived the following morning in Akita. And we were met by the owner of dormitory and some members for the Akita Government. The apartment owner warmly welcomed us and lead us to our rooms. There are quite good and comfortatble rooms and we got everything arranged for us. The weather then it was very hot as I could heardly sleep since when I was leaving Lilongwe it was cold.

The first amazing thing was the removal of shoes when entering a house. Anyway as the say that "do what the Romans do." However I tried to ask people why shoes are removed and Iwas told it is their custom.

In Akita we were taken to the Governor who had recommended us to take our training in Akita. He gave us ht freedom of going and mixing with Japanese people and learn as much as possible about the Japanese people, culture and technical development. It was a really interesting atmosphere regardless of our statues. Hovever in general Japanese people are kind and very much interested in foreigners regardless of skin colour. The clear-up keeping of the city of Akita gave me the clean-minded people I couls work with.

The domltory food is quite good and there are trying as posslble to make us feel at home. And I am as if in my home country. The food is not dlfferent. Only differs in cooking and lt was my flirst time to use "hashi." I really did have problems to eat but now I am an expert in using "hashi." I remember oneday I went to a hotel restaurant since on Sunday we eat wherever we like. I was given a fork and knife and I did just the opposite until I asked for hashi.

We are not feeling home sick despite the language problem since there are some organizations which are interested in foreign affairs. And from these group you can pick a friend as there are some who want to learn English and we have advantage of helping each other. As they try to teach us Japanese and we teach them English.

However, the two-month language training I had has helped me a lot to communicate in essential places like hospital, post office and some important places. But in general "Nihongo Muzukashi,"mainly Hiragana. Now I can write and read Katakana and Kanji. I wished that important places like "no smoking" could be written in English, as a good smoker I am always afraid to make a mistake as I will smoke where there is no smoking sign.

The overseas associationls trying its best to let us visit interesting places. So far we visited Hachimantai, Tazawa-ko and Hokkaido. It is quite good not only to learn the technical skills, but culture and scenery of Japan. The people in general are friendlyI, malnly older women. They try to show interest in us. Young boys and girls are shy. Mainly I have noticed that they are afraid to speak English to avoid mistakes. Although they have English classes at school most of them can write good English but to speak "Muzukashi."

My technical studies are progressing quite well. the only problems is language and the equipments are a bit different, but however I am trying hard at least to get something. Since here you have highly technical testing equipment of which when I go home I will never have a chance of using those equipment when testing any fault related to my career. However it's a good gift since the world is changing and everything is changing technically.

My instructors are very much willing to teach me the operation and maintenance of different equipment. My blg problems is the manuals since there are inJapanese, as I have said I cannot read them. But there are some kind people who are willing to translate for me. Particularly my Japanese teacher Mr.Kitagawa is doing all the best for me to translate.

However I am glad to be in Japan and see things for myself and at the same time I will be highly technically trained in my field for the development of my country and I only hope one-day I will have another change of vislting this wonderful country.

Griffin Rashid Kunje
Africa Malawi
29years old
Trainee in High Voltage Switch Gear
Address : c/o wakoryo
Barajima 2-chome
Akita-shi

協力隊員が広報誌を発行

マラウイ派遣の青年海外協力隊員佐藤純子さん(秘書隊員)らの手で、「月刊 Malawi News」という広報誌が発行されています。Malawi Newsは、同国の新聞 DailyTimes などの記事をダイジェストし、毎月のできごとを簡潔にまとめたもので、コピー刷り B5 版 4 ページから 8 ページ。同国の記事のほか、JOCV コーナーも設け、隊員の間で大いに親しまれ、活用されています。ここに最新号(1985年11月号、通算第7号)の一部を転載いたします。(日本マラウイ協会にはバックナンバーがそろっています。コピー希望の場合にはどうぞ当会まで御連絡ください。)

< 10月の国内主要記事 >

日付は新聞掲載日

- 1日(火) ▷西独政府は対モザンビーク食糧援助向けにマラウイより4千トンのメイズを購入したと発表。昨年は世界食糧プログラム(WFP)と共同で3千トンのメイズをモザンビーク向けに購入している。これによる過去2年間のマラウイの外貨収入高はK420万に上る。▷ポリテクニク大学で第2回豆腐作りセミナーがマラウイ中小企業開発協会(SEDOM)の主催で開かれる。
- 2日(水) ▷ブランチタイヤのクワチャ国際会議センターで第19回東南アフリカ地域電気通信会議が2週間の日程で開かれる。▷マラウイのLEPRA協会活動視察のため訪問していた英国同協会会長が2週間の日程を終え帰国。▷10月14日より今年のクリスマス記念切手が発売される予定であると郵政省が発表。
- 3日(木) ▷9月9日から12日迄、米国北カロライナ州で開かれたFlue-Curedタバコ栽培者協会国際会議の席で、来年の開催国にマラウイが指名される。▷クワチャ国際会議センターで世界の14の会社が参加して最新の電気・電子通信機器展示会が2週間の予定で一般に公開されている。
- 4日(金) ▷マラウイ議会党本部は、9月30日迄の党员メンバーシップカードの更新に伴う収益金の内訳を発表。それによると南部地区 K648,379.50、中部地区 K543,225.50、北部地区 K183,683.00 となっており合計 K1,375,288.00 の収益金が得られた。
- 5日(土) ▷ムズズで開かれていた今年度のマラウイ議会党大会が終了する。▷労働大臣は党会計報告書をもとに、過去4年間の各地区議会の負債総額が K82,607.78 に上っていることから、党大会出席者に対し遺憾の意を表明する。▷国連設立40周年を記念して特別にデザイン・プリントされたカンガ(チテンジの一種)が民間の織物会社より1枚(1.79m) K7.31 で発売される。
- 7日(月) ▷バンダ大統領はムズズ市に正式に市の勅許を授与する。
- 8日(火) ▷ムジンバ地区で行われたマラウイ議会党大集会でバンダ大統領は子供たちにマラウイの伝統・習慣を教えることの大切さを述べた。▷東南アフリカ地域電気通信会議に参加した日本電気(NEC)の代表はマラウイの通信システムの現状を一応評価しつつも、さらに改善するにはより近代的な設備が必要であると語った。▷リロングウェで、マラウイ、ザンビア及びWHOの共催による放射線セミナーが1週間の日程で開かれる。▷国連40周年記念総会に出席するためマラウイ代表団が出発した。

- 9日(水) ▷農業大臣を兼任するバンダ大統領は来年の作物の政府買い上げ価格を発表。綿花、米、ピーナッツ、豆類、マカデミアナッツ、カシューナッツの価格がkg当たり2tから5tの幅で値上げされる。▷小学校教師のための算数教授セミナーが開かれ、小学校児童の算数能力の低さに憂慮の念が示される。また、農業指導のためにも学校に畑を作ることが奨励される。
- ▷リロングウェの市民代表団6名が12日間の台湾公式訪問のため出発、台湾の建国記念行事に参加する他、姉妹都市の台北市長と行政、技術協力、文化面での情報交換をする予定。
- 10日(木) ▷マラウイ旅券手数料が値上げされる。1回往復旅券はK5に、数次はK6からK10へ値上げされ、ビザもK2.25から1回用ビザはX5に、多数回用ビザはK10へとそれぞれ値上げされる。▷パッケージング産業会社はK120万の費用をかけて、輸出用紅茶の梱包箱に使用するアルミ紙の製造に乗り出す計画。これまで輸入に頼ってきたアルミ紙輸入費K20万の外貨が節約されることになる。▷英国の援助で近々、バラカ、カスング、ンチュウ、マンガチ、モンキイベイの5カ所にデジタル電話回線が設置される計画。▷リロングウェのカウマ村に在マラウイ米商婦人協会とマラウイ政府の支援で手動ポンプ(K3,600)が設置された。▷マラウイ中央銀行は10月29日に11年満期、年利16.75%の公債を発売すると発表。
- 11日(金) ▷バンダ大統領は北部での党大会を終え、ブランチタイヤへ帰着。▷10月14日を“規格の日”として記念するとマラウイ規格局が発表。▷ゾンバの国会報道課は、バンダ大統領が10月1日付でルンビとカタベイ出身の2名の女性議員を任命したと発表。
- 14日(月) ▷ブランチタイヤでマリブ世界ディスコチャンピオンマラウイ大会が開かれ、ゾンバの21歳の学生が優勝。今年末にロンドンで開かれる世界大会にマラウイ代表として参加する。▷ブランチタイヤで中央、東南アフリカ地域ILO人事管理セミナーが4日間の日程で開かれた。▷ンチャロのマラウイ砂糖公社(SUCOMA、従業員数7千人)を訪れた労働大臣は労使関係の改善を訴えた。
- 15日(火) ▷1985/86学年度のカムズアカデミーフォーラムI入学試験合格者が発表され、合格者はK200の年間登録料(3回に分割できる)と物品破損前払い料金K35を支払うように通知される。▷特惠貿易圏(PTA)閣僚委員会の議長を務めるブンデクの通商産業大臣がバンダ大統領を訪問、PTA活動の進展状等について意見の交換を行う。



▷ゾンバで国会が開催される。
▷国連設立40周年記念行事が全国各地で行われる。
JOCV ▷オフィス便り ▷号外 ▷JOCV関連記事掲載



The resident representative of the United Nations Development Programme (UNDP) and resident co-ordinator of UN system operational activities in Malawi, Mr. Zaide Gabre-Madhin, addresses guests to a flag-raising ceremony, marking the start of the 40th anniversary of the United Nations celebrations at the UNDP offices in Lilongwe, yesterday. The Minister of Transport and Communications, Mr. W. Deleza (centre) represented His Excellency the Life President at the function. — Picture by Daily Times

月刊 Malawi News の表紙(1985年11月号)

- 17日(木) ▷カスング地区議会議長は、もっと多くの女性がホームエコノミックコースに参加するよう呼びかけた。このコースは料理、裁縫、編物、織物、農作物栽培、公衆衛生からなり、期間は5カ月間。女性の実際の知識の向上を目的としている。
- 18日(金) ▷Mother's Day(母の日)祝日、ブランチタイヤのカムズスタジアムで盛大な記念式典が開かれる。▷スイス製のソーラークッカー“サングリル”(価格K200)がマラウイでも発売される。このクッカーは通常の太陽光線で200℃から450℃まで熱せられるという。
- 21日(月) ▷国連設立40周年記念行事の一環として、リロングウェで国際料理フェアが開かれる。▷世界銀行より近々開始される都市住宅整備プロジェクトの調査官が1週間の予定でマラウイを訪問。このプロジェクトはリロングウェとブランチタイヤの旧住宅街に低価格な住宅を建設し、人々に安く提供するというもので、世銀はU\$1,500万を融資している。▷ニイカ国立公園のチェリンダキャンプ場で養蜂のセミナーが米国ピースコーの主催で開かれ、マラウイの養蜂農民22名に良質のハチ蜜の作り方を指導する。

[以下略]

(MalawiNews1985年11月号より転載)

日本マラウイ協会機関誌
「Kwacha」(クワチャ) 第3号

発行 日本マラウイ協会
〒153 東京都目黒区五本木2丁目18-14
リオマンション 2F
TEL 03-791-2591

1985年12月20日発行